

第 19 章 国造りの苦しみ：1962 年～1973 年頃（25 歳～36 歳頃）



1972 年 7 月 5 日アルジェリア独立の日における、アウレフでの行進（著者提供）

**農業指導員から教師に**

1962 年の 10 月は、アウレフの学校の男子学級と女子学級に着任するそれぞれの教師たちの到着と共に始まった。アウレフの郡長は、彼らの着任を承認する書類にサインした。この一事をもって、巷に流れていた、フランス式の学校が廃止されコーラン学校がそれにとって代わるという噂に終止符が打たれた。しかし、1962－1963 年度（1962 年 9 月～1963 年 8 月）は、混乱のうちに終わった。フランス人教師たちが帰国した後の空隙は中々埋まらなかったのだ。実際のところ、学校は全くの機能不全状態だった。こうした中、私のところに、今の仕事を辞めて、新生国家のため教職に就く気はないかとの打診があった。私は承諾し、採用試験を受けにエルゴレアへ行った。結果は合格だった。次に、ブゼリア

(Bouzerriah) の師範学校に行き、授業の方法を覚えるため 3 か月の集中講座を受けることになった。口座の開校初日は、アブデラフマン・ベンハミーダ教育大臣自らが研修生を出迎えた。ここで私たち研修生は、フランス語とアラビア語教育に必要な基礎概念と実技を学んだ。研修後、私はラグアットの教育委員会に配属され、1963 年 9 月 24 日、アウレフの小学校の男子学級の教師として着任した。とはいえ、実際の授業の展開には全くの素人だったので、初年度は準備学級（訳注：フランス式では CP クラスと呼ばれる。日本の小学校 1 年に相当）と初級 1 年（CE1 クラス。日本の小学 2 年）のクラスを受け持った。全てのことに不慣れだったので、授業の事前準備にすごく時間がかかり、非常に疲れた。ただ、幸運なことに私が配属された学校には、フランス人教師のゲスベルジェ（Gesberger）さんが指導員として残ってくれていた。

一方で、この年はいいこともあった。1963 年 11 月頃、妻のメサウダの三度目の妊娠が明らかになったのだ。1964 年 6 月 12 日、最初の息子モハメッドが誕生した。いつもと同じように、赤ん坊が生まれてから 1 週間目に、沢山の親戚や友人が招き、先祖の供養と赤ん坊の命名の儀式が行ったが、この時の招待客の数は 400 人にも上った。

学校の仕事は忙しく、自由になる時間などまるでなかったが、教育委員会は我々教師に、技能向上のため更に研修を受けるよう言ってきた。それからの数年間は、毎年夏休みになると、私は追加研修のためアルジェリア北部へ行った。そこでは毎回数週間を費やして、教育理論と実践、それに一般教養について講義を受けた。また、最低限のアラビア語の知識も要求され、アラビア語能力試験にも合格しなければならなくなった。私は、コーラン学校で既に一定の知識を身に付けていたので、少しの学習で試験には十分だった。1965 年の 4 月、私はインサラーにアラビア語の試験を受けに行き、一回目で合格した。

ところで、この年の 7 月、妻のメサウダの 4 回目の妊娠が明らかになり、家族は喜びで沸いた。翌年 3 月 12 日、第四子で三女のハリマ（Halima）が無事誕生した。

1965-66 年年度のこと、私は自主的に志願して、年度末にエルゴレアで行われる初等教育教員免許の試験を受けることにした。試験は 3 日間に渡って行われた。試験結果が出るまでには一週間かかるとのことだった。口頭試問では、プレゼンテーションをするテーマは抽選で決められるが、私には「心の働き」が当たった。この試験では、教授たちの前で、黒板に図を書きながら、説明して行かなければならない。私は小学校しか出ておらず、ほとんど独学で学んで来たので、私の発表を上手く組み立てられなかった。結果は不合格で、私も結構落ち込んだ。しかし、教員免許を諦めた訳ではなかった。また、アウレフの学校の同僚教師で、心根のやさしいガスベルジェさんが、私の手助けを買って出てくれた。彼は、毎日学校の仕事の後の一時間、上級のフランス語や、幾何や代数を教えてくれた。私も一生懸命学んだ。そして、私は翌年（1966-67 年度）も、教員免許試験に出願した。この年の試験はアドラールで行われた。ここの教育委員会が治める学区は、サウラからベシヤールまでである。二回目の挑戦で私は合格した。嬉しかった。一か月後、郵便書留で、ベシヤールの教育委員会から証明書が届いた。私は、アウレフの郡役所で、この証明書のコピーを発行してもらい、それをまた書留でラグアットの教育委員会へ送った。私の当時

のアウレフの小学校での肩書は、「教育指導員」(moniteur de l'école) というものだったが、1967-68 年度の新学期が始まる一週間前、教育委員会から通知が届き、私は上級の役職に昇格した。

私が教員免許試験に受かり、教師として新たな一步を踏み出したのとほぼ時を同じくして、我が家には第五子で次男のアブベクル (Aboubekour) が誕生した。1967 年 10 月 27 日に生まれのこの子は、不運な子だった。出産時のトラブルで知能に障害を負ってしまったのである。私は常々、妻のメサウダに、自宅での出産は危険が伴うので、必ず病院で生むように言っていた。病院でなら、出産時に何か起きても、すぐ適切な処置がしてもらえる。しかし、この時の妊娠では、私の母と妹のゾーラが、他の女たちと同じように自宅でお産をするようメサウダを説得し、メサウダも折れてしまっていた。私だけが、そのことを知らなかった。結局、赤ん坊はチアノーゼの状態生まれ、生まれた後中々産声を上げなかった。この出産時のトラブルは、赤ん坊の脳に後遺症を残した。少し大きくなってくると、この子は、しゃべり始めるのは遅かったが、肉体的な成長は普通に見えた。しかし、アウレフの病院のスイス人の医師は、痙攣などの症状は、数年経ってから現れることが多いと言った。この医師の言葉通り、アブベクルは 7 歳になった頃から、段々しゃべらなくなり、自分の殻に閉じこもったようになった。この息子については、また後で話したいと思う。

### 消えたフランス人兄弟

さて、話は少し遡り、私が教員免許試験を受けようと思った最初の年 (1995-1966 年度)、私の勤めるベンバディス (Benbadis) 男子校に二人のフランス人教師が赴任して来た。アレキサンドル・デュラスタンディ (Alexandre Durastanti) と、その弟のジャン (jean) である。兄弟はコルシカ出身で、二人ともまだ独身だった。兄のアレキサンドルは校長に就任したが、彼はイスラムに改宗していて、スカンデル (Skander) というイスラム名を名乗っており、アルジェリア国籍も取得していた。アルジェリアの独立闘争の間、アレキサンドルは革命軍を援助し、独立後も新生政府の下で、バトナの病院長や漁業局の事務局長などのポストを歴任した。新しい校長の着任後、学校は全体がよく調和して機能するようになり、教職員の間にも相互尊重の雰囲気生まれていった。学食の料理人や用務員も、校長や教師に対して、一段低い身分だと引け目を感じるようなことはなかった。なお、年度末に試験を控えていた私にとって、フランス語を母語とする同僚教師の存在は頼もしい援軍だった。私は毎晩デュラスタンディ兄弟の家へ行き、11 時ごろまで一緒に勉強した。しかし、この幸運は長くは続かなかった。兄弟たちは翌年の新学期にはアウレフに戻ってこなかったのである。

1965-1966 年度が終わり、夏の長い休みが始まると、兄弟はニジェールへ行った。兄アレキサンドルは彼の地から私に通の手紙をよこし、フェルジャニ・ハジ・モハメッドさんにコンタクトをとってくれないかと頼んで来た。通称エル・ライル (El-lail'アラビア語で「夜」の意) と呼ばれるこの人物がアウレフからニジェールへ行くので、自分がアウレ

フに残して来た貯金 3000 ディナールを持って来て欲しいというのだ。私はフェルジャニさんにメッセージを伝え、輸送は直ぐ実行された。しばらくしてアレキサンドルから、確かに金を受け取ったという手紙が来た。同じ手紙の中で、彼は、近頃行われたアルジェリアの地方議会選挙のことに触れ、アウレフの議会には、本当にアルジェリアのことを考えている人物が議員として選ばれたかと訊いていた。実は、当時アウレフの住民の間では不和の波が広がっていた。表立った衝突こそなかったが、住民は社会主義擁護派と批判派に分裂していたのだ。

アレキサンドルはアルジェリアにいた時、本当に熱心な社会主義の闘士だったので、気になったのだろう。私は返事を書き、ニジュールのアマール・タレブという会社の私書箱宛に送った。アレキサンドルは、この会社の会計係として雇われたのだった。私は、アレキサンドルが誠実なアルジェリア愛国者であると信じていたので、手紙には、この国の現実を包み隠さず書いた。しかし私の返事は、アレキサンドルの下へは届かなかった。私の手紙は何者かに開封されてしまったのである。もし、手紙の中にアルジェリアの革命政府を批判する文言があったなら、手紙は直ちに情報当局へ送られていただろう。やましいことは何も書いていなかったが、私に関する悪い噂が広まり、世間での私の評判を傷つけた。これは多分、将来私が選挙に出ようとした時に影響するに違いなかった。

フランス人の兄弟は、二人とも独身のせいで自由過ぎたせいだろうか、結局ニジュールから戻ってこなかった。私はなんだか彼らに見捨てられたような気持を抱いたまま、1966 - 1967 年の新学期を迎えた。郡役所はラグアットの教育委員会に校長がいなくなった旨の書簡を送り、事情を知った教育委員会は暫定的に校長代行を任命した。なんと白羽の矢は私に当たった。私は正直思った。誰か助けてくれと。校長の業務をこなすため、授業は 2 コマだけ担当すればいいことになったが、教員免許試験の問題がまだ残っていた。どうしたらいい？私は弱気になって行った。しかし、一方ではこうも自分に言い聞かせた。弱気になってどうする、もし、これで自分で選んだ教師という尊い道を諦めるようなことになったら、残りの人生ずっと後悔することになるぞ、と。デュラスタンティ兄弟は学校に戻ってこなかったが、他の教師は皆顔を揃えていた。中には、ルドゥベアさんの顔もあった。彼は、もう 5 年もアウレフで教えているベテランで、奥さんと子供も当地に住んでいた。ルドゥベア先生は、私の右腕になってくれ、骨惜しみすることなく私を補助してくれた。私は彼に大いに救われた。

### ジャンピエール・ルドゥベア先生

ジャンピエール・ルドゥベア (Jean-Pierre Le Devéhat) さんは、心の優しい熟練した教師で、アウレフのベンバディス男子校に赴任後、生徒たちの学力向上に大いに貢献した。彼がアウレフに着任したのは 1964 年のことだったが、離任したのは 1973 年なので、実に 10 年弱の歳月をこの地で送ったことになる。

ルドゥベアさんの教育にかける情熱は大きく、いつも最善の努力を傾けていた。彼が余りに熱心に、自分の知識を生徒に授けようと奮闘するので、私は責任者として、彼が倒れ

てしまわないかと心配したものである。彼の努力は実を結び、教え子の中から多くの傑物を輩出し、今でもアウレフの誇りとなっている。特に名前を上げたいのは、医学博士のベントアイエブ (Bentayeb)、気象エンジニアのカサブ (Kassab)、税関の地方局長のハウイド (Khaouid)、アルジェリア中央銀行幹部のラグサシ (Lagssassi) の各氏である。もちろん、この他にも多くの優秀な若者が、彼のお蔭で豊かな知識を身に付け実社会に旅立って行った。私も、学校の運営について度々彼に助言を求めた。また、私が学校に不在になる時は、ルドゥベアさん校長の職務を代行してくれたが、彼はそんな時でも自分の授業を普段通り完璧にこなした。彼は、同僚教師や生徒たちからは無論のこと、生徒の親たちや、その他のアウレフの住民からも高く評価されていた。

ルドゥベアさんは、学校の仕事の他、人道援助の活動にも熱心で、奥さんのアニエスと共に、恵まれない人々や障害者のために尽力した。夫妻は貧しい家の人々と付き合い、自分たちの家にそうした人々を躊躇なく招き入れた。また、彼らの子供たちは地元の子供たちに溶け込んで遊んだ。1965 年の大洪水の時には、被災した何家族かがルドゥベア夫妻の家に数週間の間身を寄せた。なお、この期間に、妊婦が一人夫妻の家で子供を出産している。洪水で父も母も失ったベンセギール (Benseghir) という子供がいたが、災害孤児たちへの保護政策が固まって行き先が決まるまで、アニエス夫人が母親代わりとなってこの子供の面倒をみた。ルドゥベア夫妻は、離任後の 1975 年に再びアウレフにやって来た。彼らはサハラ以南の国への旅の途中だった。夫妻の二人の子供たちは、両親の旅行中、かつての孤児ベンセギールの家で過ごした。またそれから更に 35 年後 (2008 年?)、夫妻は再び当地にやって来た。今度は息子のアルノーと彼の妻、それに友人のモレル夫妻と一緒にだった。懐かしい恩師の再訪に、かつての教え子たちは喜びで沸き立った。なお、ルドゥベアさんは、アウレフにいた当時、学校での仕事の傍ら、トゥアレグ族の社会や先史時代の遺物にも関心を寄せていた。彼は、そうして分野の記録を著作としてまとめ、私にも贈ってくれたが、次に挙げるのは、その中に記録された資料の一つで、今回私がこの家族史を書くに当たり大変な助けとなった。

歴代のフランス人教員リスト:ジャンピエール・ルドゥベア氏提供

